

稲盛和夫のフィロソフィーと西郷南洲翁遺訓及び  
日新公いろは歌の連関についての考察

A Study on the Relationship between Kazuo Inamori's Philosophy,  
the Teachings of Nanshu Saigo, and the Iroha Poem by Prince Jisshin

町田尚史  
MACHIDA, Hisashi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第59号 2025年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.59 2025

# 稲盛和夫のフィロソフィーと西郷南洲翁遺訓及び 日新公いろは歌の連関についての考察

町田尚史

## 要 旨

一代で京セラやKDDIの前身となる第二電電（DDI）を創業し、合計数兆円企業に育て、倒産した日本航空（JAL）を3年で再建し、再上場に導いた稀代の経営者稲盛和夫は、アメーバ経営という独自の経営手法だけでなく、理念経営により数万人を導いてきた。中小企業の一経営者が経営の中から導き出した人生成功の処世術のルーツは何処にあるのか。生まれ育った薩摩の基礎となる郷中（ごじゅう）教育とは何か、などについて経営学の観点から関心が湧く。

稲盛和夫が京セラ創業以降に出会い、自ら経営理念の基礎とした地元の偉人である西郷隆盛の言行録である西郷南洲翁遺訓及び16世紀に薩摩や日向など南九州を統一した島津家第15代領主島津貴久公の実父島津忠良（日新）が残した、島津日新公いろは歌とどのように連関があるのか。そもそも薩摩生まれの3名の思想にどのような連関があるのか、についても関心が湧く。この研究では、質的研究法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して、稲盛和夫のフィロソフィーと西郷南洲翁遺訓及び日新公いろは歌の連関について分析した。結果的に3つの概念は400年の時代を超えて、連関していることが分析により明らかになった。特に稲盛和夫のフィロソフィーが稲盛和夫が敬愛する西郷隆盛の言行録である西郷南洲翁遺訓に正の影響を受けているだけでなく、薩摩での教育を背景に、400年前に遡る日新公いろは歌からも正の影響を受けていることが明らかになった。400年に渡り薩摩の人々が受け継いできた理念には、時代を超えても人が生きていく中で基礎とすべき、もしくは人生で重要なコアな思想・資質とすべき概念があると考えられる。

キーワード：稲盛和夫、フィロソフィー、西郷隆盛、西郷南洲翁遺訓、島津忠良（日新）、日新公いろは歌、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

## 1. 問題意識と研究目的

稲盛和夫は、1932年1月鹿児島市に生まれ、現在の鹿児島大学卒業の後、京都市の松風工業に入社。その後周囲から稲盛和夫の技術を世に問う、という形で京都セラミックを創業、その後わずか12年後には株式上場を果たすなど、戦後ベンチャーの旗手とでも呼ぶべき経済人・アントレプレナーである。その後1984年には我が国の通信自由化の中で、「動機善なりや、私心なかりしか」という問

いを6か月間自らに問うた後、現在のKDDIの前身である第二電電（DDI）を創業し、2024年現在5兆円を超える売上規模の巨大企業の基礎を築いた。また晩年79歳になる2010年には、倒産した日本航空（JAL）の再建を会長として主導し、3年後には再上場を実現し、その類まれなる経営手腕は我が国の経済人の中でも特筆すべきである。稲盛和夫は創業経営者として京セラ1社のみの成功でも卓越しているが、その後のKDDIの創業及びJALの再建においても余人に代えがたい成果を挙げ、戦後における特筆すべき名経営者であると言える。ただその経営は、アメーバ経営という手法も独自であるが、【利他の心】や【動機善なりや私心なかりしか】、【心を高める経営を伸ばす】、などの哲学を厳しく追い求める独特の稲盛フィロソフィー、理念型経営により成立している。社会貢献のために納税額の最大化を目指し、利潤の最大化を目指すことが経営者の唯一にして最大のミッションである中で、【利他の心】を経営の基礎に置く手法に戸惑いを覚える人々や経営者も多く、その事業がB to Bであることも影響して、一般消費財を扱った松下幸之助氏や本田宗一郎氏などと並ぶ経営者であるにも関わらず、その知名度は大学生や一般人には必ずしも高くはない。

筆者は1992年自ら会社を創業し、1994年より稲盛和夫が主宰する経営者指導塾である盛和塾でその終了となる2019年まで塾生として教えを受けてきた。入塾当時500名足らずの経営者の学びの場であった盛和塾は、稲盛塾長の高齢による2019年終了時は塾生が1万5千名を超え、塾生は日本のみならずアメリカやブラジルなど世界各地に及び、海外の最大規模である中国の経営者たちも多数盛和塾に学ぶために我が国を訪れていた。

稲盛和夫塾長は1997年癌の手術を受けるまでは、年間12回以上日本各地を中心にブラジルやアメリカなどでも自ら経営講話を行い、その場でも独自の経営手法であるアメーバ経営についてよりもフィロソフィーや人の生き方についてほとんどの時間を割き、講話終了後は塾生と共に会食をされ、質疑応答にて塾の終了時間はしばしば延長された。

また盛和塾の塾長講話の中では、何度も西郷南洲翁遺訓について話をされた。安藤（2013）によれば稲盛和夫塾長が西郷南洲翁遺訓について学ばれたのは、京セラ創業の後であるとのことであるが、稲盛和夫フィロソフィーには、結核という死病などを乗り越えてきた自らの生きざまと共に西郷南洲翁遺訓の影響が色濃く映し出されていると生前より感じていた。

稲盛和夫と西郷南洲翁の関わりを求めて、2017年3月、4日間その名残ある薩摩の地を訪ねた。鹿児島空港を降りると、すぐに巨大な霧島市西郷隆盛像が出迎えてくれた。坂本龍馬が西郷南洲翁のすすめで妻のお籠を連れて日本初の新婚旅行にて尋ねたと言われる霧島温泉に逗留した後、翌日は南洲神社に詣で、西郷南洲顕彰館を訪ね、鹿児島市城山西郷隆盛洞窟などを訪れた。南洲神社では、西南の役で命を落とした薩摩を中核に遠くは遺訓を編纂した旧荘内藩士の若い方々の墓碑銘が数限りなく佇んでいた。西郷南洲顕彰館では、今も小学生の副読本として、【西郷どんの教え】など西郷南洲翁の複数の書籍が販売されており買い求めた。没後140年以上経過した今でも西郷南洲翁の生きざまと思想が薩摩の人々の教育に活かされているとすれば、幼少期を鹿児島の地で過ごした稲

盛和夫の精神の基礎に西郷南洲翁遺訓の影響が色濃いことは容易に想像できる。また江戸時代には各地の藩が独自の学校＝藩校を設立していた。日本初の藩校は、1669年（寛文9年）に岡山藩主池田光政が設立した岡山藩学校であるといわれる（富岡, 2014）。また名古屋藩が寛永年間（1624-1644）に設立した明倫堂が日本初とも言われる（原田, 1973）。その後会津藩の日新館、佐賀藩の弘道館、熊本藩の時習館などが設立されたが（苏鷹・周, 2020）、薩摩では比較的遅く江戸後期に藩校が設立されている。しかし薩摩には、400年以上前から郷中（ごじゅう）教育と呼ばれる人間形成・人格形成を目指した、自発的・継続的な教育活動の場があったといわれる（安藤, 2013）。郷中教育とは、方限（ほうぎり）という地域単位にて、7歳くらいから25歳くらいまでの武士階級の青少年が団体（郷中）を編成し、特別の施設もなく特定の教師もおらず、特別の公的補助も無しに、薩摩武士たるべき人間形成・人格形成を目指した、自発的・継続的な教育活動である（安藤, 2013）。

またその礎は薩摩・大隅地方統一を果たした、島津家第15代領主島津貴久公の実父島津忠良（日新）による教育活動であると言われている（安藤, 2013）。島津忠良（日新）（1492～1568）は神儒仏三教の精神に通暁し、三教を和合させた独特の「日学」を始めたと言われている。「日学」は忠孝仁義を基調とした実践躬行を主意としたもので、中世末から藩政期を通じ、治世・教育の基本方針として重視されたとのことである（安藤, 2013）。島津忠良（日新）はそれを「いにしへの道を聞きても唱へても わが行に せずばかひなし」や「楼の上もはにふの小屋も住む人の 心にこそは 高いやしき」などという「いろは歌」という和歌の形式で、記憶に便利な方法により自らの思想を伝え、学問の第一歩として学ばせ、武士の日常生活に活かされていたという（安藤, 2013）。

京セラ、KDDIそしてJALという併せて8兆円を超える売上規模（2024年9月1日現在）を誇る企業の創業と再建を成し遂げた人間の人格形成の基礎が薩摩の地にあり、そのフィロソフィー経営により3社のみならず、経営者塾である盛和塾生1万5千名以上の経営者とその従業員や家族数十万人の生き方に寄与したとすれば、その思想と学びの基礎がどこにあるのかを知ることは、経営学の面でも大きな貢献であると考えられる。稲盛和夫のフィロソフィーが140年以上前にまで遡る西郷南洲翁や今から400年以上遡る島津忠良（日新）の考え方を基礎にした郷中（ごじゅう）教育にあるとするならば、日本及びグローバルな企業経営の神髄につながる発見がある可能性が見える。稲盛和夫のフィロソフィーと西郷南洲翁遺訓及び島津忠良（日新）の精神を明らかにした日新公いろは歌の相関についての考察を経営学の視点から深めていく。

## 2. 先行研究および分析モデルの構築

### 2.1 稲盛和夫のフィロソフィー（以下【フィロソフィー】と記述する）

稲盛和夫の哲学＝【フィロソフィー】は、稲盛和夫の著作などで多岐にわたり公開されているが、今回は京セラフィロソフィ（稲盛, 2009）として書籍化されている中で、経営だけに特化した部分を除く、【京セラフィロソフィ 第2章素晴らしい人生をおくるために】（稲盛, 2009）、に掲載され

ている62項目を分析対象とし、原文資料と分類コード名を論文末尾に掲載した。

稲盛和夫は鹿児島大学工学部で化学を専攻した技術者である。大学卒業後に就職した京都の企業は戦後間もない中で経営不振が続き、給料の遅配などで多くの同期社員も退職する中で、稲盛和夫も行く末を考えていたが、稲盛和夫の研究技術能力は卓越し、所属企業の経営が傾く中でその稲盛和夫の技術を生かすためとして、多くの方々の出資により、1959年京都市中京区西ノ京原町で京都セラミックが創業された。元来技術者であったため経営やマネジメントに関する知見を保有しないために、創業当初は技術部長であったがその後社長に就任する中で、従業員の経営管理においてはもともと父母などに教えられてきた、プリミティブ（原始的）な【人として何が正しいのか】、を基本とした倫理的、道徳的な考え方を基礎にして経営理念をそして人生哲学を構築した。その上後述のように西郷南洲翁遺訓などを知ることとなり、集約されたのが【フィロソフィー】であると考えられる。

## 2. 2 西郷南洲翁遺訓（以下【遺訓】と記述する）

【遺訓】は岩波文庫 西郷南洲遺訓：付 手抄言志録及遺文（山田，1939）に掲載されている遺訓41条、追加の2条、その他の問答7条と補遺3条の合計53項目を考察対象とし、原文資料と分類コード名を論文末尾に掲載した。

【遺訓】は薩摩にて編集、発刊されたのではないことが大きな特徴である。西郷南洲翁は倒幕による明治政府樹立を成し遂げるまでに、徳川幕府軍と複数の戦闘を経てこられたが、最後の最後まで抵抗し、薩摩軍にも多大な犠牲を生ぜしめたのが、現在の山形県に位置する庄内藩である。新政府軍に降伏する際に自分たちの命は当然無いものと考えていたが、西郷南洲翁は開城にあたり薩摩軍の武装を禁じ、庄内藩士の命を全て助けたことに対し、旧庄内藩士は感銘を受けて明治維新後も、そして西郷が下野して薩摩に戻った後もその教えを乞うために、江戸にそして薩摩に出向き、その言行を記し、1890年書籍として刊行したのが【遺訓】である。

## 2. 3 稲盛和夫のフィロソフィーと西郷南洲翁遺訓の関係

稲盛和夫はその著作【人生の王道 西郷南洲の教えに学ぶ】の中で、【遺訓】との出会いを以下のように記述している。「私が西郷の遺訓と出合ったのは（中略）。そんなある日、年配の紳士が訪ねてくれました。（中略）会社経営で苦勞し、悩みも多かったときです。子供のころから敬愛する西郷の遺訓に吸い込まれるようにして、その一条を読み始めました（稲盛，2007）。」として【遺訓】第1条を紹介し、その上で「南洲翁遺訓の冒頭を飾る一条は、組織の長をつとめるものにとって、まさに羅針盤となるべきものです（稲盛，2007）。」と記している。幼少期より薩摩の英雄として西郷を敬愛しながらも、【遺訓】の存在について会社を上場して後に初めて知ったと記述している（稲盛，2007）。

その中で「経営者たる者、四六時中会社のことを考えていなければならないことになり、個人というものは一切あり得なくなってしまう。(中略) 思い悩み、自問自答を繰り返していたのです。つまり自分自身のことは犠牲にしてでも会社のことに集中する、それがトップたる者の務めだと思い始めた、ちょうどその時に、先ほどの【南洲翁遺訓】の一節に出合ったわけです。『やはりそうなんだ!』と、私はまるで西郷に背中を押してもらったかのように感じました(稲盛, 2007)。』と記述し、「そのように『無私』の姿勢を貫き通すことは、一見非情だと思われるかもしれませんが、多くの人の上に立ち、集団を統率していくためには、なんとしても身に付けなくてはならない、リーダーの条件であろうと考え、それを自分に課してきたのです(稲盛和夫, 2007)。』と述べ、自らの経営者の岐路に立った際の、判断の軸の確認を【遺訓】により確立できたことを明らかにしている。

また稲盛(2007)の、【西郷南洲の教えは心の教え】という一節に西南戦争のあらましと西郷南洲の挙措を一通り記述した後、「ここに、七カ月にもわたった日本最後の内戦が幕を閉じました。戦死者は西郷軍が六七六五人、政府軍が六四〇三人。壮絶で悲しい戦いでした。歴史に『もし』はないと知りつつも、それほど多くの崇高な志と魂を持った人々の命を散らせることのない、別の選択肢があったのではないかと悔やまれます。また西郷という偉大な存在が、明治という近代国家日本の黎明期を生き抜いていれば、現在の日本もまた日本人も、もう少し違ったものになっていたのではないかと考えてなりません(稲盛, 2007)。』と西郷を崇敬する記述もある。さらに同じ稲盛(2007)の【現代にこそ生きる『遺訓』】という最終章では、「企業や経済の健全な発展も社会や国の明るい未来も、世界の人々の安寧も、すべては私たち一人ひとりがその心を磨き上げることから始まるのです。そのとき、我々の心の鏡になるのが、この【南洲翁遺訓】なのです(稲盛, 2007)。』と記述し、自らの心の在り様を【遺訓】によって磨いてきたことを基に、心の鏡として【遺訓】を学ぶことの重要性の意義を明示している。

また吉田(2020)では、「稲盛は【南洲翁遺訓】からは多大な影響を受けているが、ここでは、いくつか重要な部分を挙げておきたい。稲盛は特に人の上に立つリーダーは無私の精神力をもつ必要があることを説く。(中略)『遺訓』第1条の解説として、稲盛は『西郷は政治を例に挙げて言及していますが、これは大企業の経営者であれ、中小企業の経営者であれ、さらにはどんな小さな組織のリーダーであれ、トップに立つ者はこういう心構えでなければならないということを示しています(稲盛, 2007年)。』と説いている(吉田, 2020)。』と記述されている。

さらに吉田(2020)では、『遺訓』第25条の解説として、『『人を相手にせず、天を相手にせよ』、これもビジネスで大切なことです。商談をするときでも、人を相手にせず、天を相手にせよ、つまり、自分の心の中にある誠、自分の心のなかにある真っ直ぐな心、すなわち正道をもって対すべきだという意味です(稲盛, 2007)。』と説いている。

また「才識だけでは不完全であり、リーダーには人間性が重要であるというのは、稲盛が繰り返し説くところであるが、【遺訓】の中にも、稲盛自身が常々、説いている内容とも合致することを

説いている部分があった。この部分については、稲盛自身が自ら様々なところで説いてきている内容である。この部分は稲盛が西郷の影響を受けて、このような考え方になったというよりは、稲盛からみて自身が説いていたことの内容を【遺訓】に見つけ、「わが意を得たり」という感じであったと思われる（吉田, 2020）。」としている。

上記のことを踏まえて、以下の仮説を導出した。

仮説1 西郷南洲翁遺訓は稲盛和夫のフィロソフィーに正の影響を与える。

## 2. 4 日新公いろは歌（以下【いろは歌】と記述する）

【いろは歌】は川畑（2022）に掲載されている47項目を考察対象とし、原文資料と分類コード名を論文末尾に掲載した。鳥津日新公とは16世紀に多数の土豪の林立により混乱していた薩摩・大隅などの九州南部を統一した鳥津忠良である。鳥津家は薩摩国守護職、その後大隅・日向守護職に任ぜられ鎌倉時代の蒙古襲来の時期に九州の御家人たちに警護を命じた際に南九州に根を張っていった。鳥津忠良は鳥津家の中でも伊作（いざく）鳥津家の分家であり、当時数十家あったと言われる鳥津家を分家支流の鳥津忠良が統一した。ただ戦乱の中で荒れていた領内の人々の心を定め、教育するために理解しやすい和歌として作成されたのが、【いろは歌】であると言われている。短い31文字の中に人として何が大切かという考えを47項目で表現している。その後薩摩鳥津藩には、郷中（ごじゅう）教育という独自の教育制度が生まれた。薩摩藩士を薩摩武士らしくし、理屈よりも行動力を重んじ、命よりも名を惜しみ、質実剛健を旨とし、団結力に富む、反骨精神旺盛な薩摩武士道がこの郷中教育から生まれたとされている（斎藤, 2000）。この郷中教育において聖典としての役割を果たし、薩摩武士たちの精神的支柱になったのが【いろは歌】とされている（斎藤, 2000）。

## 2. 5 西郷南洲翁遺訓と日新公いろは歌の関係

【遺訓】全編を見渡しても、【いろは歌】の記述は皆無である。しかしながら次の2. 6に述べる通り、吉田（2020）によれば薩摩の郷中教育の内容としては、【いろは歌】や新納忠元の作った【二才咄格式定目】（にせばなしかくしきじょうもく）などが根幹とされていたことや徳川時代に教育を受けた西郷南洲翁も郷中教育を受けていたことを鑑みれば、「広く薩摩の気風・風土というものを形作ってきたものとして、【日新公いろは歌】に説かれているような徳目があった。それらの徳目は江戸時代、郷中教育を通じて武士の子弟に教えられてきた。その中から西郷隆盛らの維新の偉人たちも出てきた。江戸時代以前から伝わってきたそれらの価値観は、昭和の初期にも形を変えながらも骨格部分は残っていた。薩摩の武士的な価値観を体現した代表的人物が、幕末維新の最大の功労者の一人である西郷隆盛でもあった（吉田, 2020）。」という記述の通り、【遺訓】と【いろは歌】にも何らかの連関はあったとみるべきであろう。

## 2. 6 稲盛和夫のフィロソフィーと日新公いろは歌の関係

吉田 (2010) によれば、稲盛和夫が薩摩の郷中教育を受けていたという履歴は乏しい、という結論を下し、それらの事績から稲盛和夫が直接的に日新公いろは歌から影響を受けた、という可能性が低いとしている。吉田 (2020) によれば、薩摩の郷中教育の内容としては、先述の通り【いろは歌】や新納忠元の作った二才咄格式定目 (にせばなしかくしきじょうもく) などが根幹とされている。

一方吉田 (2020) では、「稲盛は郷中教育については『弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。本来は武士の子弟の寺子屋だ。明治以降も各地域で先輩が後輩の小中学生の心身を鍛錬する場として存続していた。薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった (稲盛, 2004)』と述べている」とその影響の存在も記述している。

同じ吉田 (2020) の【4.2: 日新公いろは歌と『京セラフィロソフィ』】において、下記のような記述がみられる。「【日新公いろは歌】が郷中教育の精神的な支柱であり、郷中教育の教育方針であったことは、既に述べたとおりであるが、稲盛自身は直接、自著の中では【いろは歌】については言及していない。したがって、稲盛が著書などで多くを語っていない以上、稲盛が強い影響を受けたというようなことをいい切ってしまうといささか問題がある。しかし、何らかの意味で、【日新公いろは歌】で説かれていることと近い内容が、『京セラフィロソフィ』で説かれているかどうかを探してみた。すると、【いろは歌】の中で説かれていることと同じ (または似た) 内容を『京セラフィロソフィ』にも見つけることができたので、これを紹介して、内容の共通する部分について考察を加えておきたい (吉田, 2020)。」としていくつかの共通概念を提示している。

その上でまとめとして、吉田 (2020) では上述の通り、【日新公いろは歌】に説かれているような徳目は江戸時代、郷中教育を通じて武士の子弟に教えられ、その教えを受けた維新の偉人たちが輩出され、その代表的な人物が西郷隆盛である。そしてその教えは【遺訓】によって、明治以降も薩摩 (鹿児島) の人々に影響を与え続けてきた。稲盛は幼少期には自然な形で、実業家としての歩みの中では、【遺訓】を読むことによって西郷の影響を受けてきた (吉田, 2020)。」と記述し、「稲盛和夫氏が間接的に薩摩の気風・風土の中で郷中教育、ひいては日新公いろは歌に影響を受けてきたとしている (吉田, 2020)。」として、【いろは歌】と【フィロソフィー】の関係性について事例を挙げながら述べている。薩摩の地で4百年間継続されてきた郷中教育に影響を受けてきた【遺訓】を崇敬する稲盛和夫が間接的に【いろは歌】に正の影響を受けてきたのであると述べている。したがって以下の仮説を導出した。

仮説2 日新公いろは歌は西郷南洲翁遺訓を媒介して、稲盛和夫のフィロソフィーに正の影響を与える。

### 3. 分析方法と結果

#### 3. 1 調査方法と変数の操作化

本研究の調査は、【フィロソフィー】に【遺訓】及び【いろは歌】がどのような連関を持つかについて、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手順に従って行った（戈木, 2016）。具体的には以下の手順を行った（戈木, 2016）。

(1) オープン・コーディング：データを詳細に読み込み、概念名を付与する。

(2) アキシタル・コーディング：関連する概念を結びつけ、カテゴリーを生成する。

(3) セレクティブ・コーディング：コアカテゴリーを特定し、各カテゴリーを理論的に統合して現象を説明するモデルを構築した。データの分析を通じて生成された概念やカテゴリーを修正、統合しながら、理論的飽和に至るまで繰り返した。

その上でデータの中でのカテゴリーが明確になったところで、類似している概念をグループ化し、これらのグループに見られる主題を解釈することで、【フィロソフィー】形成に、【遺訓】や【いろは歌】がどのように影響を与え、連関があるのかについて概念的理解を重ねた。

分析対象とする【フィロソフィー】は、前述の通り民間企業経営に特化した個所を除く62項目を、【遺訓】においては【問答】及び【補遺】を含めた53項目と【いろは歌】47項目に関しては一部現代語訳を作成の上、文章の意味内容に基づき切片化し、文脈およびその意味を踏まえて概念名を付けた。概念名を並べ複数の概念名を比較検討し、同種類の概念をまとめ、カテゴリーを生成した。生成したカテゴリーについて、時代背景、事象、条件などの相互関係を検討し、【フィロソフィー】、【遺訓】、【いろは歌】が、どのように連関するかについてその構造を明らかにした。

#### 3. 2 分析結果

##### 3. 2. 1 【いろは歌】及び【遺訓】が【フィロソフィー】に与える影響

本研究で中核となる【いろは歌】、【遺訓】及び【フィロソフィー】は前述の通り成立した時代が異なる。【いろは歌】は1539～1546年頃に作られたとされ、【遺訓】は明治23年（1890年）に刊行され、【フィロソフィー】は京セラを設立した1959年以降に成立したと考えられ、約400年の時を超えて、3つの考え方が成立している。

【いろは歌】は戦乱の中で混乱を極めた地域の土道教化、師弟教育のために忠良により和歌の形式で書かれた指針書であり、それは政治的、統制的及び教育的な背景を帯びていたと考えられる。一方、【遺訓】は明治政府樹立の立役者でありながら、腐敗した新政府に嫌悪感を覚え、公的役職を辞職し、薩摩の地に戻り私塾を営んでいた西郷隆盛の多様な人生体験の中から輩出された歴史・政治・人生語録である。また【フィロソフィー】は技術者でありながら、京セラ経営の中で経営とは何か、人は何を求めて生きるのか、などに苦悩し、結核で生死の境をさまよった幼少期からの薩摩や両親からの教えを基礎に、自ら企業経営の中で、編み出してきた人生訓、処世訓ともいえる。

そのように時代も環境も生きざまも異なる三者三様の考え方を、【日新公いろは歌及び西郷南洲翁遺訓がどのように稲盛和夫のフィロソフィー】に与えたのかという連関に関して分析した。

### 3. 2. 2 分析内容

本分析では、6つのカテゴリー、24の概念が生成された。なお、本文中においてはカテゴリーを〈 〉、【フィロソフィー】、【遺訓（及び遺訓のコーディングデータ）】、【いろは歌】の文言を≪ ≫で表す。記述内容の文意から読み取れる概念を分類した際に、概念から〈道理〉、〈行動・実践〉、〈心・思い〉、〈人・仲間〉、〈指導者〉、〈自然性〉の6つのカテゴリーを生成した。これらをコアカテゴリーとして分析を進めた。本研究の分析モデルを図1. に示した。また生成されたカテゴリーと概念概念の定義を表1. に示した。

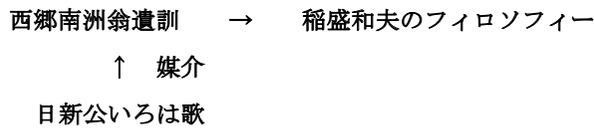


図1. 本研究のモデル

表1. 生成されたカテゴリーと概念 概念の定義

概念	定義	キーワード
カテゴリー① 道理	人が社会的動物として生きる中でなすべき言動・正しいこと・理にかなうこととその事象・理が明確な言動	
1. 正しいことを行う		・他者貢献・誠・正道・天道・正義・徳・倫理・天・道理・道徳・道徳・筋道・理勢・道勢・感謝・思いやる・真理・物事の本質・本質を究める・正しいことを、正しく行う・忠孝・尊厳廉恥・天地・普遍性・至誠・宇宙の意志・運命・調和・公私のけじめ・モラル
2. 礼を尽くす		・礼・礼を尽くす
3. フェアネス		・フェアネス・公明正大・公平公正
4. 原理原則		・原理原則に従う
カテゴリー② 行動・実践	考えること以上に行動することが重要・100の正しい意見や考えよりも1つの実践が大事	
1. 言葉・考えることよりも行動する		・実践・実行・行動・言葉より行動・今の行いを大事に・困難・有言実行
2. 挑戦		・決断・断行・チャレンジ・挑戦・成功するまで諦めない・目標達成・地味な努力・成果・一歩一歩の積み重ね・体得・努力
カテゴリー③ 心・思い	自分が強く思うこと・心が行動を決める・利他の心に象徴される他者貢献の重要性	
1. 自分の心の在り様が人生を決める		・心の在り様・心・自分の心・良心・自省・反省・心正しく・利他の心・考え方・心の純粋さ・私心のない心・心を統一する・信念
2. 心を高める		・心を高める・考え方・反省・心根・冷静沈着・克己
3. 思いやり		・思いやり・仁愛・誠・真心・慈愛・真心・至誠・感謝・助け合う

4. 夢を描く		・ 思い描く・自分の心の反映・願望・純粋で強い願望・潜在意識・強烈な思い・夢・夢を描く
5. 誠心誠意		・ 誠心誠意・謙虚な姿勢・敬愛
6. 強烈な思い		・ 心を奮める・勇気・潜在意識に透徹する・人間の無限の可能性を信じ、挑戦し続ける・覚悟・熱意・情熱・執念
カテゴリ④ 人・仲間	人と共に生きる・パートナーシップ・ベクトルを統一する・仲間を思いやる	
1. 一人では生きていけない		・ 優れた人との交わり・友・見識を持つ友・仲間意識
2. 家族主義		・ 家族主義・家族・同志・理解・仲間・仲間を作り、仲間を信じる・信頼関係・人の心・親子兄弟・リーダーシップ
3. 省みて、努力する		・ 自己研鑽・自己認知・他者の言動見て我が言動を反省せよ・自省・反省・復元力・自己実現・目標達成・オープンネス・真摯な態度・一生懸命・努力・真面目
4. チームを作る		・ ベクトルを統一する・統一・チームワーク・パートナーシップ・信頼・人間関係・全員参加・組織風土・成果
5. 他者貢献		・ 他者貢献・感謝・思いやる・助け合う・誠意・尊敬
カテゴリ⑤ 指導者	リーダーシップを理解する・リーダーとなる・人物を見極める	
1. リーダーシップ		・ リーダーシップ・指導者
2. 指導者の資質		・ 判断力・尊敬・信頼・実力主義・人の上に立つ人・為政者・思いやり・情け深く・情・相手を判断する・人の判断・謙虚・私・リーダー・人物観・真の實力
3. 組織		・ 人・組織風土・組織
カテゴリ⑥ 自覚性	自分を尽くす・好きになる・自分から働きかける力・自己責任	
1. 自分から働きかける力		・ 自ら機会を作り出すことの重要性・自分から働きかける力・継続は力・努力・協働
2. 好きになる		・ 好きになる・仕事を好きに
3. 自己責任		・ 成果・自己・自己責任
4. 自ら燃える資質		・ 自分を尽くす・明確な目標・自覚性・チャレンジ・挑戦・日々の努力・時間管理・学び・パーフェクト・完全主義・完璧・積極的・現状否定・勇気・進歩・奮起・学び・困難に耐える

### 3. 2. 2. 1 道理

〈道理〉のカテゴリに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図2の通りであるが【フィロソフィー】≪I-1. 「宇宙の意志」と調和する心≫に【遺訓】≪S-24. 天は人も我も同一に愛し給ふ≫、≪S-21. 講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ≫がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

また【フィロソフィー】≪I-28. フェアプレイ精神を貫く≫には【遺訓】≪S-7. 正直と誠実の重要性≫、≪S-17. 毅然とした外交の重要性≫、≪S-31. 自分の力や信念を信じること≫、≪S-34. はかりごと（かけひき）は用いない方がよい≫及び【いろは歌】≪J-9. り・理も法も立たぬ世ぞとてひきやすき 心の駒の 行くにまかすな≫、≪J-16. た・種子となる心の水にまかせずば 道より外に 名も流れまじ≫、≪J-23. む・昔より道ならずして驕る身の 天のせめにし あはざるはなし≫、≪J-26. の・通るまじ所をかねて思ひきれ 時にいたりて すずしかるべし≫、≪J-28. く・苦しくも直進を行け九曲折の 未は鞍馬の さかさまの世ぞ≫、≪J-41. み・道にただ身をは捨てんと思ひとれ 必ず天の 助けあるべし≫がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

また【フィロソフィー】≪I-53. 原理原則にしたがう≫には、【遺訓】≪S-13. 租税を薄くして

民を裕にするは即ち国力を養成する也》、《S-28. 道を行ふには尊卑貴賤の差別なし》、《S-29. 若し艱難に逢うて之を凌んとならば、弥々道を行ひ道を楽しむ可し》、《S-31. 天下挙って毀るも足らざるとせず、天下挙って誉るも足れりとせざる》、《S-38. 真の機会は、理を尽して行ひ、勢を審かにして動くといふに在り》、《S-48. 五 事の上には必ず理と勢との二つ必あるべし。歴史の上にては能見分つべけれ共、現事にかかりては、甚見分けがたし。》、《S-53. 三 若し英雄を誤らん事を懼れ、古人の語を取り是を証す。》及び【いろは歌】《J-9. り・理も法も立たぬ世ぞとてひきやすき 心の駒の 行くにまかすな》、《J-16. た・種子となる心の水にまかせずば 道より外に 名も流れまじ》、《J-23. む・昔より道ならずして驕る身の 天のせめにし あはざるはなし》、《J-28. く・苦しくも直進を行け九曲折の 未は鞍馬の さかさまの世ぞ》、《J-41. み・道にただ身をば捨てんと思ひとれ 必ず天の 助けあるべし》がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

I-1 「宇宙 の意 志」と 調和す る心	I-3 きれいな 心で願 望を描 く	I-15 ものご との本 質を究 める	I-20 本音で ぶつか れ	I-25 利他の 心を判 断基準 にする	I-28 フェア プレイ 精神を 貫く	I-29 公私の けじめ を大切 にする	I-49 小善は 大悪に 似たり	I-50 反省あ る人生 をおく る	I-52 公明正 大に利 益を追 求する	I-53 原理原 則にし たがう	I-54 お客様 第一主 義を貫 く
S-24 S-21	S-4 S-7 S-46	S-9 S-10 S-13 S-25 S-28 S-29 S-53 J-9	J-27	J-27	S-7 S-17 S-31 S-34 S-53 J-9 J-16 J-23 J-26 J-28 J-41	S-1 S-10 S-30 J-16 J-27		S-27 J-5 J-20	S-1	S-13 S-28 S-29 S-31 S-38 S-48 S-53 J-9 J-16 J-23 J-28 J-41	S-24 J-13

図2. 〈道理〉に関する概念関連図

### 3. 2. 2. 2 行動・実践

〈行動・実践〉のカテゴリーに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図3の通りであるが【フィロソフィー】において、例えば《I-11. 真面目に一生懸命仕事に打ち込む》に関して、【遺訓】《S-7. 正直と誠実の重要性》、《S-29. 困難を乗り越える決意》、《S-31. 自分の力や信念を信じること》及び【いろは歌】《J-12. を・小車の我が悪業にひかれてや つとむる道を うしと見るらん》がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。また【フィロソフィー】《I-23. 知識より体得を重視する》に関しては、【遺訓】《S-36. 実践に裏打ちされた志》及び【いろは歌】《J-1. い・いにしへの道を聞かても唱へてもわが行に せずばかひなし》、《J-31. け・賢不肖用い捨つるといふ人も 必ずならば 殊勝なるべし》がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

I-7 常に明るく	I-11 真面目に一生懸命仕事に打ち込む	I-12 地味な努力を積み重ねる	I-17 率先垂範する	I-23 知識より体得を重視する	I-40 有言実行でことにあたる
J-43	S-7 S-29 S-31 J-12	J-8		S-36 J-1 J-31	

図3. 〈行動・実践〉に関する概念関連図

### 3. 2. 2. 3 心・思い

〈心・思い〉のカテゴリーに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図4-1及び図4-2の通りであるが【フィロソフィー】においては、63項目中25項目が該当し、【フィロソフィー】において、心の在り様、思いの大切さに関する記述が群を抜いて多いことが分かる。そのため25項目中11項目では【遺訓】及び【いろは歌】に連関を見出すことはできなかった。しかしながら例えば【フィロソフィー】《I-5. 常に謙虚であらねばならない》に関しては、【遺訓】《S-4. 謙虚で模範的なリーダーシップの重要性》、《S-21. 己に克つことの重要性》及び【いろは歌】《J-11. る・流通すと貴人や君が物語り はじめて聞ける 顔もちぞよき》、《J-30. ま・万能も一心とあり事ふるに 身ばし頼むな 思案堪忍》、《J-38. き・聞くことも又見ることもころがら みな迷なり みなさとりなり》、がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。また【フィロソフィー】《I-34. もうダメだというときが仕事のはじまり》に関しては、【遺訓】《S-5. 困難を乗り越えて志を固める》、《S-29. 困難を乗り越える決意》及び【いろは歌】《J-21. な・名を今に残し置ける人も人 ころも心 何かおとらん》、《J-22. ら・楽も苦も時過ぎぬれば跡もなし 世に残る名を ただ思ふべし》とほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。さらに【フィロソフィー】《I-48. 純粋な心で人生を歩む》に関しては、【遺訓】《S-30. 志高き理想主義者》、《S-37. 真心の力》、《S-40. 君子の清々しい心》が連関し、【いろは歌】《J-2. ろ・楼の上もはにふの小屋も住む人の 心にこそは 高きいやしき》、《J-28. く・苦しくも直進を行け九曲折の 未は鞍馬の さかさまの世ぞ》、《J-38. き・聞くことも又見ることもころがら みな迷なり みなさとりなり》がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

I-2 愛と誠と調和の心をベースとする	I-4 素直な心をもつ	I-5 常に謙虚であらねばならない	I-6 感謝の気持ちをもつ	I-21 私心のない判断を行う	I-26 大胆さと細かさをおわせもつ	I-27 有意注意で判断力を磨く	I-30 潜在意識にまで透徹する強い持続した願望をもつ	I-31 人間の無限の可能性を追求する	I-33 開拓者であれ	I-34 もうダメだというときに仕事のはじまり	I-36 楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する
S-21 S-26 S-51		S-4 S-21	J-12	S-1 S-26 J-27		S-41 S-22		S-29 J-21	J-43 J-36 J-1	S-5 S-29 J-21 J-22	

図4-1. 〈心・思い〉に関する概念関連図1

I-37 真の勇気をもつ	I-38 闘争心を燃やす	I-41 見えてくるまで考え抜く	I-42 成功するまであきらめない	I-43 人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力	I-44 一日一日をど真剣に生きる	I-45 心に描いたとおりになる	I-46 夢を描く	I-47 動機善なりや、私心なかりしか	I-48 純粋な心で人生を歩む	I-51 心をベースとして経営する	I-55 大家族主義で経営する	I-59 ペクトルを合わせる
J-29 J-26		J-7						S-30	S-46 S-40 S-37 S-30 S-19 J-38 J-28 J-2	S-24 J-13		S-2 J-39 J-33

図4-2. 〈心・思い〉に関する概念関連図2

### 3. 2. 2. 4 人・仲間

〈人・仲間〉のカテゴリーに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図5の通りであるが【フィロソフィー】において、〈I-8. 仲間のために尽くす〉に関しては、【遺訓】〈S-24. 天を敬い、人を愛することの重要性〉及び【いろは歌】〈J-13. わ・私を捨てて君にしむかはねば うらみも起こり 述懐もあり〉がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

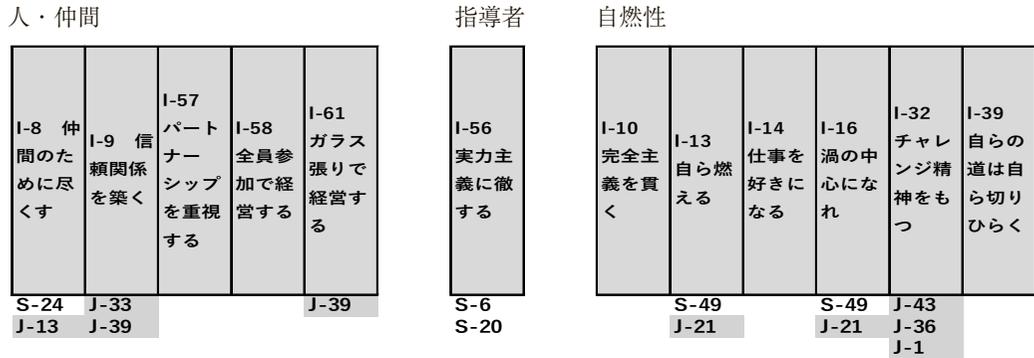


図5. 〈人・仲間〉・〈指導者〉・〈自然性〉に関する概念関連図

### 3. 2. 2. 5 指導者

〈指導者〉の категорияーに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図5の通りであるが【フィロソフィー】において、〈I-56. 実力主義に徹する〉に関しては、【遺訓】〈S-6. 適材適所の重要性〉、〈S-20. 優れた人材の重要性〉とはほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

### 3. 2. 2. 6 自然性

〈自然性〉の категорияーに関して、【フィロソフィー (I)】の項目に対応する【遺訓 (S)】及び【いろは歌 (J)】の概念関連図は図5の通りであるが【フィロソフィー】において、〈I-13. 自ら燃える〉に関しては、【遺訓】〈S-49. 自ら機会を創出する重要性〉及び【いろは歌】〈J-21. な・名を今に残し置ける人も人 ころも心 何かおとらん〉がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。また【フィロソフィー】〈I-32. チャレンジ精神をもつ〉に関しては、【いろは歌】〈J-1. い・いにしへの道を聞きても唱へても わが行に せずばかひなし〉、〈J-36. あ・あきらけき目も呉竹のこの世より 迷はばいかに 後のやみじは〉、〈J-43. ゑ・酔へる世をさましてやらで盃に 無明の酒を かさねるはうし〉がほぼ同義でありその連関を読み取ることができる。

## 3. 3 結果

本研究においては、【フィロソフィー】と【遺訓】及び【いろは歌】の連関について、以下の仮説を導出していた。

仮説1 西郷南洲翁遺訓は稲盛和夫のフィロソフィーに正の影響を与える。

仮説2 日新公いろは歌は西郷南洲翁遺訓を媒介して、稲盛和夫のフィロソフィーに正の影響を与える。

仮説1に関して、概念とcategoryの相関図及び6つのcategoryにおいて、【フィロソフィー】

と【遺訓】は連関関係がみられ、【遺訓】が【フィロソフィー】に正の影響を与えていることが明らかであり、仮説1は支持されると考えられる。また6つのカテゴリーの内5つのカテゴリーにおいて、【いろは歌】が【フィロソフィー】に対して、連関関係があり、影響を及ぼしていることは十分に考えられるが、『西郷南洲翁遺訓を媒介して』という視点では明らかではなく、仮説2に関しては、今回の分析では明確ではなく、支持されなかったと考える。

#### 4. 考察と課題

本研究では【フィロソフィー】に関して、【遺訓】及び【いろは歌】との連関について考察した。本研究で明らかになったことは以下の通りである。

第一に【遺訓】は【フィロソフィー】に正の影響を与えていたことが明らかになった。グラウンデッド・セオリー・アプローチにより【フィロソフィー】、【遺訓】及び【いろは歌】から概念を抽出し、概念から道理、行動・実践、心・思い、人・仲間、指導者、自然性の6つのカテゴリーが明らかになった。それらの6つのカテゴリーにおいて【遺訓】が【フィロソフィー】に正の影響を与えていた。

第二に【いろは歌】も【フィロソフィー】に正の影響を与えていたと考えられる。吉田(2020)によれば、「稲盛和夫氏が間接的に薩摩の気風・風土の中で郷中教育、ひいては日新公いろは歌に影響を受けてきたとしている。」とされているが、今回の分析によれば、6つのカテゴリーの内5つのカテゴリーで【フィロソフィー】は【いろは歌】と直接連関しており、【フィロソフィー】は【いろは歌】と間接的にではなく直接的に影響を受けたのではないかと考察される。

次に本研究の知見から得られる実践的含意について述べたい。上述の通り、本研究で中核となる【いろは歌】、【西郷南洲翁遺訓】及び【フィロソフィー】はそれぞれ成立した時代が各々、1539～1546年頃、明治23年(1890年)、及び1959年以降に成立したと考えられ、約400年の時を超えて成立している。400年という長き時代を超えても、連関されうる思想や概念とはどのようなものであろうか。今回の分析で導出された、〈道理〉、〈行動・実践〉、〈心・思い〉、〈人・仲間〉、〈指導者〉、〈自然性〉の6つのカテゴリーは、400年に及び薩摩の人々が受け継いできた理念であり、時代を超えても人が生きていく中で目指すべき、もしくは人生で必要なコアな思想・資質とすべき概念であると考えられる。

今回の分析では独自の発見も見られた。例えば【フィロソフィー】には「I42. 成功するまであきらめない」という概念があるが、【遺訓】や【いろは歌】には、該当する文言が無い。これは時代背景として「あきらめない」ことは当たり前であり、「あきらめれば」死する時代と現代との差異であるとも考えられる。それは【フィロソフィー】の「I44. 一日一日をど真剣に生きる」という概念も同様であると考えられる。一方〈こころ・思い〉というカテゴリーでは、【いろは歌】や【遺訓】では、心、勇気、思いやりのような概念が提示されているが、【フィロソフィー】では、夢、

心に思い描く、潜在意識、強烈な思い、などより具体的で自由な思念が概念として提示されている。これらは、やはり時代背景の差異であると考えられる。

最後に今後の研究上の課題を指摘する。【いろは歌】と【遺訓】の関係、及び【いろは歌】と【フィロソフィー】の連関関係の深掘りである。今回の分析では【フィロソフィー】と【遺訓】の関係を中核に分析を行った。また前提として、【遺訓】に媒介して【いろは歌】が【フィロソフィー】に正の影響を与えているかについても分析をした。しかしながら分析によれば【いろは歌】は直接的に【フィロソフィー】に正の影響を与えて、連関している可能性を示唆している。

そのため今後は【いろは歌】と【フィロソフィー】の直接的な連関についての分析が求められる。また【いろは歌】と【遺訓】の関係分析を深めることも重要であると考えられる。またグラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を深め、サブカテゴリーや概念や定義の確定なども深めていく必要がある。

これらの課題については継続的な調査を行い、改めて別の機会に報告したい。

#### 参考文献

- 安藤保. (2013). 郷中教育と薩摩土風の研究. 南方新社.
- 稲盛和夫. (2007). 人生の王道: 西郷南洲の教えに学ぶ. 日経BP社.
- 稲盛和夫. (2004). 稲盛和夫のガキの自叙伝. 日本経済新聞社出版社.
- 稲盛和夫. (2009). 京セラフィロソフィ. 盛和塾事務局.
- 川畑耕二. (2022). 子どもたちに… いにしへのいろはことば. ペンギン社.
- 戈木クレイグヒル滋子. (2016). グラウンデッド・セオリー・アプローチ 改訂版 理論を生み出すまで. 新曜社
- 斎藤之幸. (2000). 西郷大久保稲盛和夫の源流 島津いろは歌. 出版文化社
- 富岡直樹, & トミオカナオキ. (2014). 岡山藩教育内容の考察: 閑谷学校と岡山藩学校との.
- 原田忠四郎, & ハラダタダシロウ. (1973). 学制の主導者的研究: 特に洋行/洋学者. 日本体育大学紀要, 3, 87-101.
- 山田済斎. (1939). 西郷南洲遺訓: 付 手抄言志録及遺文 岩波文庫 青 101-1 岩波書店
- 吉田健一. (2010). 稲盛和夫の少年時代と鹿児島県精神教育-自強学舎関係者インタビューから. 鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要, 2, 151-193.
- 吉田健一. (2020). 薩摩(鹿児島)の文化と稲盛和夫. 鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要, 9, 1-15.
- 苏鷹, 高威, & 周飞帆. (2020). 日本藩校对中国书院的受容与变容——以《白鹿洞书院揭示》为线索. 千葉大学国際教養学研究=Chiba University journal of liberal arts and sciences, 4, 67-86.

## 原文資料と分類コード名

## 日新公いろは歌 47

- J-1 い いにしへの道を聞きても唱へても わが行に せすばかひなし  
 J-2 ろ 楼の上もはにふの小屋も住む人の 心にこそは 高きいやしき  
 J-3 は はかなくも明日の命を頼むかな 今日も今日と 学びをばせて  
 J-4 に 似たるこそ友としよけれ交らば 我にます人 おとなしきひと  
 J-5 ほ 仏神他にましまさず人よりも 心に恥ぢよ 天地よく知る  
 J-6 へ 下手ぞとて我とゆるすな稽古だに つもらばちりも やまとことのは  
 J-7 と とがありて人を斬るとも軽くすな 活かす刀も ただ一つなり  
 J-8 ち 知恵能は身につきぬれど荷にならず 人は重んじ はづるものなり  
 J-9 り 理も法も立たぬ世ぞとてひきやすき 心の駒の 行くにまかすな  
 J-10 ん 盗人はよそより入ると思うかや 耳目の門に 戸ざしよくせよ  
 J-11 る 流通すと貴人や君が物語り はじめて聞ける 顔もちぞよき  
 J-12 を 小車の我が悪業にひかれてや つとむる道を うしと見るらん  
 J-13 わ 私を捨てて君にしむかはねば うらみも起こり 述懐もあり  
 J-14 か 学問はあしたの潮のひるまにも なみのよこそ なほ静かなれ  
 J-15 よ 善きあしき人の上にて身を磨け 友はかがみと なるものぞかし  
 J-16 た 種子となる心の水にまかせずば 道より外に 名も流れまじ  
 J-17 れ 礼するは人にするかは人をまた さぐるは人を 下ぐるものかは  
 J-18 そしるにも二つあるべし大方は 主人のために なるものと知れ  
 J-19 つ たらしてて恨かへすな我れ人に 報い報いて はてしなき世ぞ  
 J-20 ね 願わずば隔もあらじ偽の 世に誠ある 伊勢の神垣  
 J-21 な 名を今に残し置ける人も人 ころも心 何かおとらん  
 J-22 ら 楽も苦も時過ぎぬれば跡もなし 世に残る名を ただ思ふべし  
 J-23 む 昔より道ならずして驕る身の 天のせめにし あはざるはなし  
 J-24 う 憂かりける今の身こそはさきの世と おもへば今ぞ 後の世ならん  
 J-25 い 亥に臥して寅には起くと夕露の 身を徒に あらせじがため  
 J-26 の 通るまじ所をかねて思ひきれ 時にいたりて ずすしかるべし  
 J-27 お おもはず違ふものなり身の上の 欲をはなれて 義を守れ人  
 J-28 く 苦しくも直進を行け九曲折の 未は鞍馬の さかさまの世ぞ  
 J-29 や やはらぐと怒るをいはば弓と筆 鳥に二つの 翼とを知れ  
 J-30 ま 万能も一心とあり事ふるに 身ばし頼むな 思案堪忍  
 J-31 け 賢不肖用い捨つるといふ人も 必ずならば 殊勝なるべし  
 J-32 ふ 不勢とて敵を侮ることなかれ 多勢を見ても 恐るべからず  
 J-33 こ 心こそ軍する身の命なれ そろふれば生き 揃はねば死す  
 J-34 え 廻向には我と人とを隔つなよ 看経はよし してもせずとも  
 J-35 て 敵となる人こそ己が師匠ぞと 思ひかへして 身をも嗜め  
 J-36 あ あきらけき目も呉竹のこの世より 迷はばいかに 後のやみじは  
 J-37 さ 酒も水ながれも酒となるぞかし ただ情あれ 君が言の葉  
 J-38 き 聞くことも又見ることもころがら みな迷なり みなさとりなり  
 J-39 ゆ 弓を得て失ふことも大将の ころひとつの 手をばはなれず  
 J-40 め ぐりては我が身にこそつかへけれ 先祖のまつり 忠孝の道  
 J-41 み 道にただ身をば捨てんと思ひとれ 必ず天の 助けあるべし  
 J-42 し 舌だにも齒のこはきをばしるものを 人は心の なからましやは  
 J-43 ゑ 酔へる世をさましてやらで盃に 無明の酒を かさねるはうし  
 J-44 ひ ひとり身をあはれとおもへ物ごとに 民にはゆるす 心あるべし  
 J-45 も もろもろの国やところの政道は 人にまづよく 教へならはせ  
 J-46 せ 善に移りあやまれるをば改めよ 義不義は生れ つかぬものなり  
 J-47 す 少しきを足れりとも知れ満ちぬれば 月もほどなく 十六夜の空

## 西郷南洲翁遺訓 53

- S-1 廟堂に立ちて大政を為すは天道を行ふものなれば
- S-2 賢人百官を総べ、政権一途に帰し、一格の国体定制無ければ
- S-3 政の大体は、文を興し、武を振ひ、農を励ますの三つに在り
- S-4 下民其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し
- S-5 若し此の言に違ひなば、西郷は言行反したるとて見限られよ
- S-6 君子小人の弁酷に過ぐる時は却て害を引起すもの也
- S-7 事大小と無く、正道を踏み至誠を推し、一事の詐謀を用う可からず
- S-8 先づ我国の本体を居え風教を張り、然して後徐かに、彼の長所を斟酌する
- S-9 道は天地自然の物なれば、西洋と雖も決して別無し
- S-10 人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり
- S-11 文明とは道の普く行はるゝを賛称せるを言う
- S-12 実に文明ちやと感ずる也
- S-13 租税を薄くして民を裕にするは即ち国力を養成する也
- S-14 入るを量りて出づるを制するの外 更に術数無し
- S-15 決して無限の虚勢を張る可からず
- S-16 節義廉恥を失て、国を維持するの道決して有らず
- S-17 正道を踏み国を以て斃るゝの精神無くば、外国交際は全かる可からず
- S-18 縦令国を以て斃るゝとも、正道を践み、義を尽すは政府の本務也
- S-19 己を足れりとする世に、治功の上りたるはあらず
- S-20 人は第一の実にして、己れ其人に成るの心懸け肝要なり
- S-21 講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ
- S-22 兼て氣象を以て克ち居れよ
- S-23 堯舜をもって手本とし、孔夫子を教師とせよ
- S-24 天は人も我も同一に愛し給ふ
- S-25 人を相手にせず、天を相手にせよ
- S-26 己を愛するは善からぬことの第一也
- S-27 自ら過つたとさへ思ひ付かば、夫れにて善し
- S-28 道を行ふには尊卑貴賤の差別なし
- S-29 若し艱難に逢うて之を凌んととならば、弥々道を行ひ道を楽む可し
- S-30 命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也
- S-31 天下挙つて毀るも足らざるとせず、天下挙つて誉るも足れりとせざる
- S-32 道に志す者は、億業を貴ばぬもの也
- S-33 平日道を踏まざる人は、事に臨て狼狽し、処分の出来ぬもの也
- S-34 策略は平日致さぬものぞ
- S-35 人に推すに公平至誠を以てせよ
- S-36 朱子も白刃を見て逃る者はどうもならぬと云われたり
- S-37 天下後世迄も信仰悦服せらるるものは只是一箇の真誠也
- S-38 真の機会は、理を尽して行ひ、勢を審かにして動くといふに在り
- S-39 体有りてこそ用は行はるゝなり
- S-40 君子の心は常に斯の如くにこそ有らんと思ふなり
- S-41 君子の体具ふる共、処分の出来ぬ人ならば、木偶人も同然なり
- S-42 (追加) 一 事に当り思慮の乏しきを憂ふること勿れ。
- S-43 二 漢学を成せる者は、弥(いよ)漢(いよ)籍に就て道を学ぶべし。
- S-44 問答 一 猶予(ゆうよ)狐疑(こぎ)は第一毒病にて、害をなす事甚多し、何ぞ憂国志情(しじょう)の厚薄に関からんや。
- S-45 二 至誠の域は、先づ慎独より手を下すべし。
- S-46 三 知と能とは天然固有のものなれば、「無知之知(ハ)。不(シテ) (レ)慮(ヲ)而知(リ)。無能之能(ハ)。不(シテ) (レ)学(ハ)而能(クス)」
- S-47 四 勇は必ず養う処あるものなり。孟子云はずや、浩然之氣を養うと。此氣養はずんばあるべからず。
- S-48 五 事の上には必ず理と勢との二つ必あるべし。歴史の上にては能見分つづけられ共、現事にかかりては、甚見分けがたし。
- S-49 六 事の上にて、機会といふべきもの二つあり。僥倖の機会あり。又設け起す機会あり。
- S-50 七 変事俄に到来し、動揺せず、従容其変に應ずるものは、事の起らざる今日に定まらざるべからず。変起らば、只それに應ずるのみなり。
- S-51 (補遺) 一 誠はふかく厚からざれば、自ら支障も出来るべし、如何ぞ慈悲を以て失を取ることもあるべき、決して無き筈なり。
- S-52 二 剛胆なる処を学ばんと欲せば、先づ英雄の為す処の跡を観察し、且つ事業を趣味し、必ず身を以て其事に処し、安心の地を得べし、然らざれば、只英雄の資のみあつて、為す所を知らざれば、真の英雄と云ふべからず。
- S-53 三 若し英雄を誤らん事を懼れ、古人の語を取り是を証す。

稲盛和夫フィロソフィー62

- I-1 「宇宙の意志」と調和する心
- I-2 愛と誠と調和の心をベースとする
- I-3 きれいな心で願望を描く
- I-4 素直な心をもつ
- I-5 常に謙虚であらねばならない
- I-6 感謝の気持ちをもつ
- I-7 常に明るく
- I-8 仲間のために尽くす
- I-9 信頼関係を築く
- I-10 完全主義を貫く
- I-11 真面目に一生懸命仕事に打ち込む
- I-12 地味な努力を積み重ねる
- I-13 自ら燃える
- I-14 仕事を好きになる
- I-15 ものごとの本質を究める
- I-16 渦の中心になれ
- I-17 率先垂範する
- I-18 自らを追い込む
- I-19 土俵の真ん中で相撲をとる
- I-20 本音でぶつかれ
- I-21 私心のない判断を行う
- I-22 バランスのとれた人間性を備える
- I-23 知識より体得を重視する
- I-24 常に創造的な仕事をする
- I-25 利他の心を判断基準にする
- I-26 大胆さと細心さをあわせもつ
- I-27 有意注意で判断力を磨く
- I-28 フェアプレイ精神を貫く
- I-29 公私のけじめを大切にす
- I-30 潜在意識にまで透徹する強い持続した願望をもつ
- I-31 人間の無限の可能性を追求する
- I-32 チャレンジ精神をもつ
- I-33 開拓者であれ
- I-34 もうダメだというときが仕事のはじまり
- I-35 信念を貫く
- I-36 楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する
- I-37 真の勇気をもつ
- I-38 闘争心を燃やす
- I-39 自らの道は自ら切りひらく
- I-40 有言実行でことにあたる
- I-41 見えてくるまで考え抜く
- I-42 成功するまであきらめない
- I-43 人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力
- I-44 一日一日をど真剣に生きる
- I-45 心に描いたとおりになる
- I-46 夢を描く
- I-47 動機善なりや、私心なかりしか
- I-48 純粋な心で人生を歩む
- I-49 小善は大悪に似たり
- I-50 反省ある人生をおくる
- I-51 心をベースとして経営する
- I-52 公明正大に利益を追求する
- I-53 原理原則にしたがう
- I-54 お客様第一主義を貫く
- I-55 大家族主義で経営する
- I-56 実力主義に徹する
- I-57 パートナリシップを重視する
- I-58 全員参加で経営する
- I-59 ベクトルを合わせる
- I-60 独創性を重んじる
- I-61 ガラス張りて経営する
- I-62 高い目標をもつ

Machida, Hisashi

## Abstract

Kazuo Inamori is a rare business leader who founded DDI, the predecessor of Kyocera and KDDI, in one generation, and grew it into a trillion-yen company. He also rebuilt the bankrupt Japan Airlines (JAL) in three years and led it to relisting. He has not only led tens of thousands of people with his unique management method called amoeba management, but also with management principles. What are the roots of the way of life that a manager of a small and medium-sized business has derived from management? What is the Goju education that is the foundation of Satsuma, where he was born and raised? From the perspective of business management, it is interesting to know what it is like.

How is it related to Saigo Nanshu Ikun, the record of the words and deeds of Saigo Takamori, a local hero whom Kazuo Inamori met after founding Kyocera and used as the basis of his own management philosophy, and Shimazu Nisshin Iroha Uta, left by Shimazu Tadayoshi (Nissin), the father of Shimazu Takahisa, the 15th lord of the Shimazu clan who unified southern Kyushu, including Satsuma and Hyuga, in the 16th century? First of all, I am interested in the relationship between the ideas of the three men born in Satsuma. In this study, we used the grounded theory approach, a qualitative research method, to analyze the correlation between Kazuo Inamori's philosophy, the teachings of Nanshu Saigo, and the Nisshin Iroha Uta. As a result, the analysis revealed that the three concepts are related across 400 years of time. In particular, Kazuo Inamori's philosophy is not only positively influenced by the teachings of Nanshu Saigo, which are the words and deeds of Takamori Saigo, whom Kazuo Inamori admires, but also by the Nisshin Iroha Uta, which dates back 400 years, due to his education in Satsuma. It is believed that the ideals that the people of Satsuma have inherited for 400 years contain concepts that should be the foundation for people's lives, or that should be important core ideas and qualities in life, regardless of the era.

Keywords: Kazuo Inamori, philosophy, Takamori Saigo, the teachings of Nanshu Saigo, Tadayoshi Shimazu (Nissin), Nisshin Iroha Uta, grounded theory approach